

小開  
說明

春雨文庫

二編  
上

35

30

25

20



A 448  
3

松村春輔編輯

開明

小説

# 春雨文庫

二冊編

櫻雨園社中蔵版



春雨文庫二編之自序

雲ゆき雨旋しそ易の乾の詞たる集る  
 そほつ窓の下瓶よ水したる白梅の香り  
 志のばも古る如大禹の代も黄金比雨  
 梁武帝の時代も玉の雨き津ぬら  
 甘き路に雨も年代記も見え西条の雨  
 歴史も我たるを實や十日の雨出る水  
 破らぬ鯨の魚も雨も集り雨虎も雨も葉

48-7535



しそ出づ。高羊の雨も先たつて舞ひ。  
 石燕石を破つて花ふ。たんと之を減る  
 の徒然。おのひ出でる雨宮。漕水  
 ましと旅人の願ふを野路の俄雨。五七の  
 の笑ひも。雨あつてある地。まれとかやれ  
 来歴古事。事ある文庫の奥。あふぐ。  
 還る川。留れ岸。澄き天水。桶  
 餘りぬ。水不破の扉。屋の板。むき。

大方を漏し。いさげ。と細雨書屋の  
 雨より。拍子。漸く序文の代り。たんと。

于時明治十年二月上旬  
 細雨亭の窓下日記

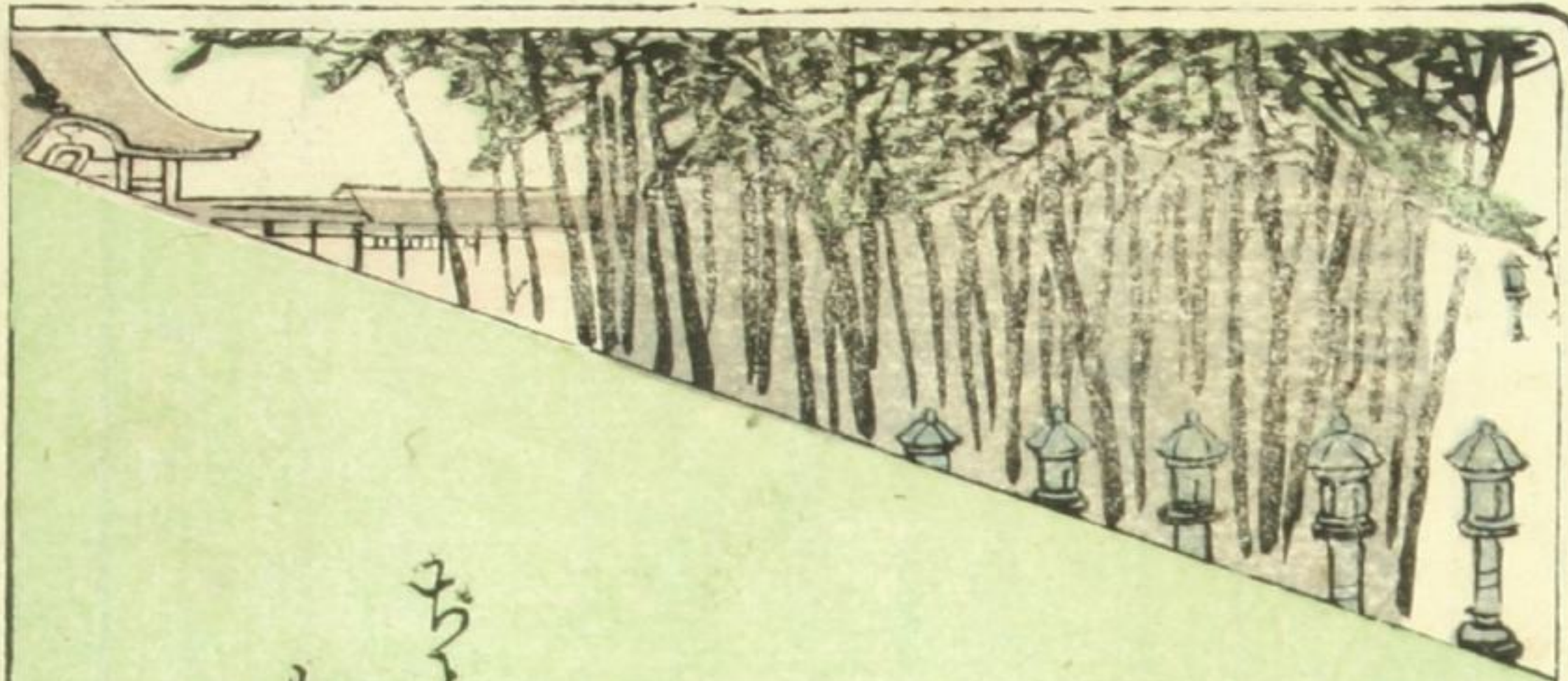
松村春輔











吉三郎  
女房於増

ちりせきるき

おみのたき

せうり

まきえゆ

松のつゆ

大久保春驪



北野神社之景



笹井吉三郎





雲衣のあはれしうらみあはれしあはれしあはれし

軍のしるしあはれしあはれしあはれしあはれし

まゆみ 小海家 ありまき水

しるしあはれしあはれしあはれしあはれし 梅亭

春雨文庫第二輯卷之上

東京

松村春輔著述

大久保春驪校訂

第四回

まろろえの木れこま写まみえ西る神えん植ぎやう風ぜをふ育まとの  
あるどなるらんど頓とん阿あがよ詠まれと言ことのま葉はのま志しを  
りき張ち聞きんん子こ規き所しみま北きた野の御おん神かみをま灵れい驗げん今いまもま著し明めい  
あまとを商しやう法ぽう繁はんぜう金きんまうけけ何なん卒そつ配はいせてて下くださいいと



むら 願ひを懸ましくも恐こき 灵前参詣の人の絶  
間も夏すぎて秋とし言ハ淋しさの増しく一ト群立  
騒ぐ雲ふむらつく雨脚の早きハ時の日和らせ晴り  
て出ー夕月もまど三日四日の細眉木の間小ぐらき森  
の蔭身形やつれ一人の男が 詠ハ白齒の娘と連れ往  
るやとらる其振も衰れ杖を力あ何びきの山路を  
ぬも息を切らし 女吉さん再降て来さうど旅工雲を  
おろつて居るが最降りハ仕人何どり道が滑溜の

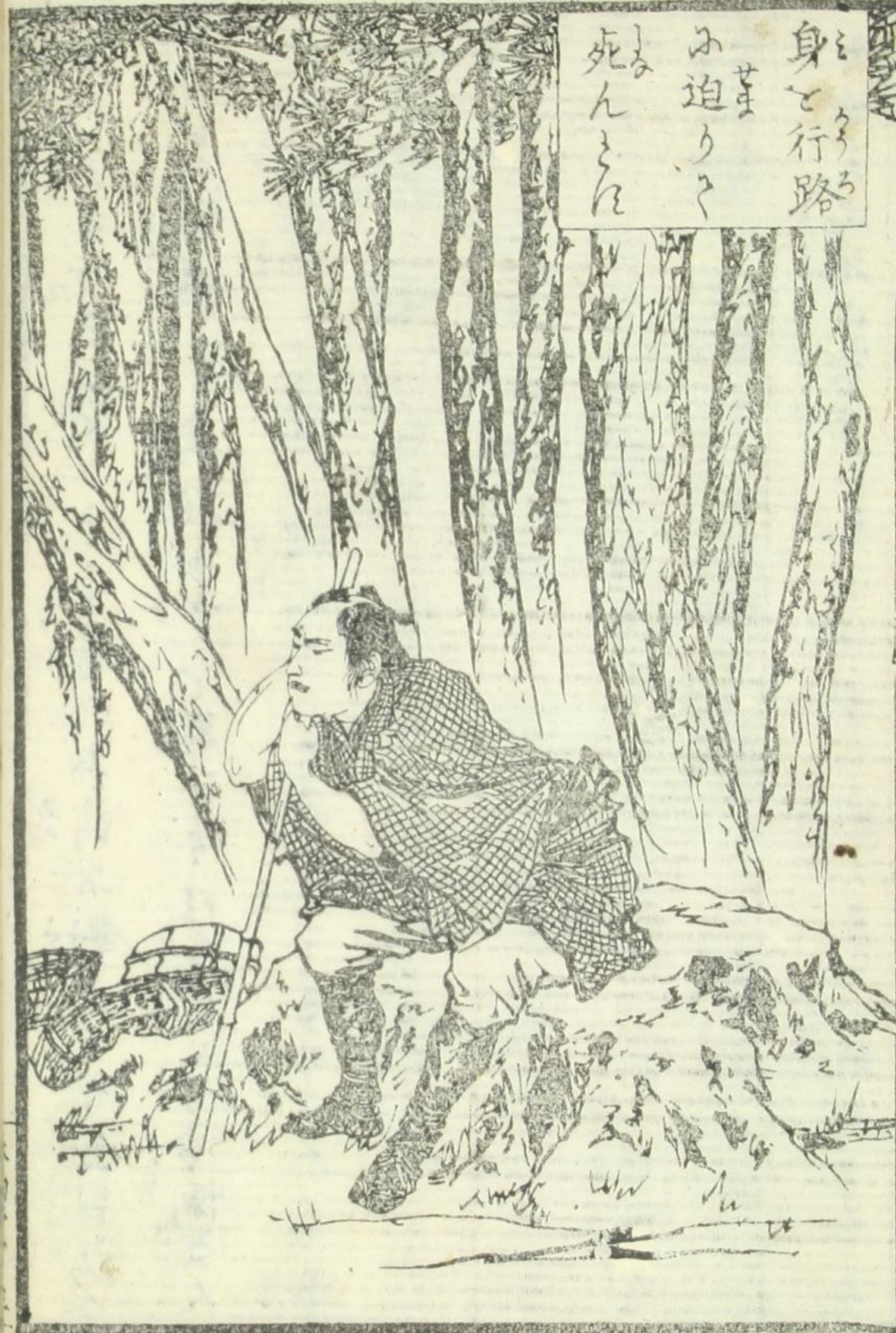
で自己ア実みがつりしと「ホニ肥つてお在らう口ぐ  
さん服が摩てお困りどの此間うら無理な道と歩  
行とのぞ踏出し脚がだんく悪いのどヨマア吾俯の  
肩へまろりりと捕つてお出な 手前どって瘡と梅らへ  
疲つて居るぢやア 女ア 丈どけとど由 其様み痛  
くの無ヨト口でハ言人ど敢果とらぬ足の運動と男を  
察し「急いとして往く當の移入旅の空此処らで一服  
やららうさうト傍の松の切株の露と拂ひて腰と懸こ



む女も側そば腰こしとかけ男の顔かほと覗のぞひて見みるくく「ちの  
と彼様かさまして居ゐる間ま小膝こひざを揉もませうう「男おとこア宜よろ手て前まへ也  
草くさ卧ふて居ゐらアト言いひるがう「思おもはず「思おもひ四邊よっぺを  
見みまわして「男おとこお場まを方かたふも思おもひぬ難むづか免まとかけ自己おれも  
此こ様さまなふ苦くるしと為なるくくおるく「借金かきんが有あうとも生く  
ふ小居おるのが場まであうと便よりみりて来きと人ひとハ知しれず路みち  
用の金かねハ悉しん皆みなるくある病やまハ次第しだいふ重おもい足元あしもと我身わがみる  
がらも愛相あいせの盡つきとまをり合あせホニ智恵ちゑの後あと男おとこどと

思おもつとヤアあめんうと女房おんなぼうのお前まへふ對たいしても面目めんめく夜よ  
女おんなア何様なんざうして其根そのねる度どと思おもひまはるもの々子こ怜あはれ人ひと  
でも間まの悪わるくあると彼様かさまとこのので有ありませうから平たい  
常じょうの通とほり強つよい心こころふ成なる居ゐて下くださいる後ご生せいどくうサト  
言いさ人も潤うるむ声こゑ音ねふ堰せきあめん涙なみだ見みせト話わと移うつ更さら  
ハア宜よろいとして今夜こんやの趣向しゆかうハどう仕しませう後ご人ひと「自己おれも  
まと案あんトて居ゐるのサ無む扱じやくハ今宵こんよひのさふ野宿のよどくと為なるふ  
もせよ土地とちの容よう子すハ知しらず賣うる物ものハ一ひと昨日きのうより





身と行路  
み迫り  
死ん  
ん  
ん



昨日昨日よりの今日と日よ日は迫る身の難儀明日の  
凌ぎの思案がはるねへ実の力と落させめへと今まで  
隠して居とけまども脚氣の層と増して来て最  
一ト足も歩行移く目已ア覚悟と極てあまらざる  
知らずの他人でも女の身あり世話のあらくれ人ら  
有う手前の跡も残つ居て何とく工夫とつけてくも自  
己の命の惜くいねへ手前の躰が案とられるト言と半  
もゆき敢ず女の其処も泣ふト色戀で逃とのちやア

三年以来はとと良人のお前が彼様と事か  
ら死で仕舞とせの後で誰と便りふへんくと生るがら  
へて居らとませう故々を放れ知らあいの土地で草の肥  
み成て果る由約束ととと諦めて居りますく何卒  
一所も死してトかき口説れと男のいと声と曇らせ眼  
とあつととき常く知つと一徹る其方の氣性さうと  
了るるくせ留ても止るめらりその腐内れ此処で  
二人が女ア死で未来で何時までも言つ顔と見逢せ



て思おもひむワツと声こゑ立たれハ男おとこもよト忍しのび音ねふいとど  
子こあけき黄き昏こみ松まつの梢えだハ啼な梟うし千ち草くさふすどく虫むしさ  
へも共ともふ衰あれと添そへふけり

茲こゝハ漂さまよ泊ふ二人ふたりの素す性じやうを尋たづねる男おとこハ備ひ前ぜんハ岡おか山さん  
在ある小こ田た村むらの農のう夫ふうあて笹さ井ゐ吉きち三さん郎らうとよハ者もの力ちから量りやう  
衆しゆ人にんふすぐれ相あ撲つを取り劍けん術じゆつと遣つふとと好あむ  
田た畑はたの業わざふハ却かへて疎うろり又また女おんなハお場まちとつへる者もの  
ふとく三さん年ねん前まへハ隣となり村むらの某たれより娶めとり仲な睦むつましく

暮くしけらぐ歩あははく不ふ仕し合あふ借か財ざい嵩かさめを京きやうへ  
出でて俱ともハ稼かせぎ賃ちん入いれの田でん畑はたと請う戻けりさんなど相あ談だん  
しと世せ帯たいとあまハ小こ田た村むらの家いへと賣う拂りひ差さし當あら  
る負お債つのかとつけ聊い残さうれし金かねを以もて路ろ費ひとま  
西さい京きやうの知ち己ぢと便べんりハ都みやこの空そらへあはらし上のりたれし  
折せ悪あく吉きち三さん郎らう脚あしを踏ふ出でし間まどる旅あり貯たくわへ  
路ろ銀ぎんを無なくし辛くるしで京きやうハ着ちき力ちからとたのむ知ち己ぢ  
の家いへと尋たづねる去き年ねんの秋あきはろ何なに国くにへ立たちのき



おの往く先と知らずと言きその頼との綱き  
れて途方を失ひ思はずも迷ひ北野の夕まぐれ借  
あそ死んと覚悟の為したまは此一條の由るまき贄  
言ふ似うりと雖も既ふ初編ふ解とところの島田佐  
兵衛が木屋町の別荘君香のゆと命と結ると  
の濫觴るまの看官志をうく退屈と忍びて狂由  
まの末と御覧あらんと涙解ののそ  
吉三郎夫婦の者の身の寄るべどまなくも覚悟

あまがら衰さの又今さうふ泳増して震ふ手元  
小腰かいさぐり心細帯引きなどき死ふ小野の森と  
もあらず松の下枝へうちかけ引を翻る葉ず人  
の雨二人が袖を濡まきり涙ふ呉て居りし吉三郎  
いゝと励ま一人の来ぬるサア早くアイトお増も  
身支度多し既ふ縊死よとんえたる折しも彼救  
助ト女の声「ハツと答ふり詞と共ふ木蔭を飛び出  
る二人の侍吉三郎とお増を抱きとめ「うまらず短む



の振まひを致すまひぞト動ろを祢をツツとをりり不憚く  
兩人「何方さるる存トません」何卒まの場をおる適  
一放して死ろさく下さいまし、あせりて止らぬ二人ダ  
傍へ社殿の方より徐々来る年のころ四十むりの  
上謁めく被衣を外し志とやうふ「其方」ところが窮迫の  
この前の程より物うげで残らず聞ろ居りま」と死  
うと必ふを若気の誤り板令一時の袖むひして人の門  
迎ふ立うとも容易ふ命の捨られまひ今日あうぎうて

黄昏ふ此御社へ参詣せし其方たち二人を救助よ  
との威徳天神のお指揮およるものあらん悪の様ふの  
為ぬちどふ氣を安くして居とが宜いコレ衛士衆二人を  
大造勞れと梶子よく介抱して連れて来やト物柔らう  
ふ解諭さると吉三郎とお増の二人の夢ふ夢見し心地  
一ツハツとまうりふ平伏たり  
吉三郎お増を助け北野の社へ参詣の婦人の如  
何ある者ぞ下回みあらしを自然しと解りぬぞ



然しかるこれ是こゝあるあり一いつ回まいのの劇げき場ば不ふ比ひ較かくハハ発はつ端たんとと唱なふふ台たい場ば所しよ不ふ  
て喜き永えい五ご年ねん九く月げつのの事ことありあり次つぎ回まいのの文ぶん久きう二に年ねん二に月げつ中ちゆう  
旬じゆんのの説せつ話わふふしてして前まへのの條じょうよりより十じゆ年ねん後ごののとととと見み玉たま  
へか

第五回

洛中らくちゆうと少すこ離りとてとて閑静かんせいと占しむれどど諸物しよぶつふふのの事ことかかぬ清きよ  
水寺みづでらのの坂さかの下した黒板くろばん塀べいふふ家いえととかかここひひ門かどをを這はい入いれればば根ね  
府川ふりがわのの飛石とびいし斜しやふふ敷敷ははくく糸いと黄楊わうやう山さん茶花ちやかのの前まへとと前まへ  
春雨はるあめ止と上あへ

刀たのの際ぎはららののききりりとと石燈籠いしとうろうふふむむすす苔こけもも當所とうしよふふ古こ  
き住居すまゐととんんぢぢれれどど二に回まいのの玄関げんかんありありととみみぎぎ表うら又また懸くけけ  
名札なふだのの東湖とうこ風ふうのの筆勢ひつせいよよくく六む代だい經驗けんげん整骨せいこつ處ところ荒井宗あらいむね  
意いとと書記しよき一いつ玄関げんかんふふのの白布しろぬいををとと手てとと巻まきき足あしとと緘ひづりげげ  
たる人々たるとう多おほくく赤あかつつどどいい療治りやうぢのの番ばんのの来きるるゆゆひひとと待まち  
草くさ卧がれてて已おのがが隨ま意い百轉ひゃくてんのの口くちかかりりままりりくく未まささ何なんぞぞりりふふ  
寒さむいいででののははなないいまませせぬぬりり「を振はささ子こ夫それふふ志しててハハ一いつ昨きのう日ひ  
の初午はつごのの伏見ふしのの蒼稻あいら菟うへへ大おほききうう人ひとがが出でううけけままううと



料理屋などの大分賑りのことの評たん世間ふい無  
益る金田とをふくものがありまして子イヤまでも  
子らのやうな年が年中がちくして居て鼻の先の觀  
音さんへもろくお参りせね板る者をうりでの威  
り場の人とちの活計が立ませんてアアイヤ觀音さ  
んと言は別當の月照さんい宜いお方であらうと云  
つとが買ふことかえらういお嫌ひぶとのとトヤガツイ此程  
逃亡と為るまことこの借金の訳でい有りますすまひ何

どう外国人が来てうう襟裡さんと関東の代官との間  
が混雑つき景気おどる銭まうけも有りません  
因ふふの清水寺の住僧成就院月照の外国船渡  
来のためふ日本の國體を失るおんご成憂ひ攘  
夷鎖港の激徒と共志をとげんと力を竭り同意  
の者と密に我寺中よかこまひ置きらんとせしが  
此ふろ幕威を不盛んありて是らの黨と探索す  
るご厳酷るまは諸藩士と共み逃亡ご難を



西國小遁るとりへども身と寄すべきの所多く憂  
苦と慷慨ふや堪えざりけん終に薩州の海に身  
と投じ国家と思ふの念力より果るべき際悟と遂  
いとあまん

一月照さんる異人ぎらゝのから起つて脱走し遠ひる  
この話一江戸で正月の十五日に御光中の安藤の登  
城するに待りけ坂下門の前で浪人が大勢取りま  
き切ら掛つたと云ふは是も元の起りを異人どのの評

判異人うら江湖上小寐ことの多く成とふに困り切り  
まに免角ことなることアツク折く奥の療治場で  
十七番のお方一呼ぶ声と吹つけハハくいやと吹  
が参りまゝと此時表のうとより一て年齢三十四五  
ふく衣服髪飾もきつとせし女が小腰と屋め入  
り来り案内と請ふ声きつけ誰と應へて立出る  
内弟子らうき惣髪男が今来一年増の顔を見て一  
これに関取都石さんのお内方お堀さんサアと云





ら人「まづびら浄免何そむしませし女関ふ居る人  
 ぐへも會釈ありつゝ療治場へ通るん得世の中の具  
 員とたのお相撲取の如才内儀と知らせとり主人の  
 宗意を療治と為るぐ「コレハ珍らぬお語さんら  
 宜く来ぬすつゝ買取ぬ此あひと祇園ぐ一寸あひ  
 まゝとが其後かちつゝもどざらんナ「ハイ森ドる  
 ぐ手前よかまけ大は無沙汰を致しませし宿せも  
 宜しく申し訳りせしものと云るぐ幅紗包とを取



ひろげ「此品の例の驚知らず餘り少いでござるお外が  
洗場のお客かろへ来るしきころはお目お掛ます宗一  
盃やるめの何よりの物毎度お乳のどくすと徳作  
ながらお坊へお掛お坊の少一膳とすれりア一今度宿  
でい依前の岡山へ奥行は下りませが古々と言ひふ  
と出ころころ初めころまうのでござるにぬる自分用や  
何うとかけく餘計な間々これませうねが二夕月三月  
へ帰らませませひませどうき些降けいくもぬるませ

春利上十二

んが例の古膏菜と十包とわど願つて裁けとやませと  
「夫は目出とい縁取の話をいさして居る久しうりの  
古々の錦まへののメおいふ為るころで有る僕も於てぬ  
が勇む膏菜の今延して上るから少一待て居さるいぬ  
是はヨ次のお人を傍に居る弟子が大声とて「イ十八番の  
お方トよびませ「應と答へり隔紙へとて一小座敷よ  
り伸を考へころ立出ころ此ころ京で人の名を知る目  
明しの文吉と言ふころの幕府の光りと冠ふきて虎の



威と借る狐毛の袷まき散眼顔みあつくりこるるぐらう  
先生お袴ふいとあり附移人かろ何卒叮嚀お療治を  
お頼と中しやす<sup>宗</sup>何処と痛めさしやつこのごとく私<sup>文</sup>の  
古い歩身でござんやす今年であかけ五年前島田様  
かろの西内意で近衛家の村岡とつみ女をたらめ諸  
藩の者を召捕るとき橋本左門とつみ奴と引組で椽  
ろろ庭へ落とちとぐと御影の飛石で脇腹を突や  
とぐ撲身不成ととんえて暑<sup>あ</sup>寒<sup>さ</sup>サのかたまりあふの免<sup>と</sup>

角痛んで困りやすと向ず語りの手柄をるると側み聞  
ありお坊へ丈と顔を見つめ膝を寄せ手お握りたる  
煙管の羅字の推けて折るも知らぬ半り脳かくら  
んづ勢ひあるしがホツと一息忽地お首をたきて思案の  
辨<sup>あ</sup>文<sup>ん</sup>吉<sup>き</sup>のりろ肌ぬぎ先生との処でござんやす<sup>宗</sup>牙<sup>あ</sup>只  
今<sup>いま</sup>お増<sup>ます</sup>さんお膏<sup>かう</sup>菜<sup>さい</sup>が出来<sup>でき</sup>ましと折<sup>や</sup>ろ何<sup>な</sup>れの童<sup>どう</sup>  
子<sup>こ</sup>みや声<sup>こゑ</sup>張<sup>は</sup>り上<sup>あ</sup>て小学<sup>せうがく</sup>讀<sup>よ</sup>本<sup>ほん</sup>  
神<sup>かみ</sup>の暗<sup>くら</sup>き所<sup>ところ</sup>も明<sup>あ</sup>くみ見<sup>み</sup>るそのゆゑ人の知<sup>し</sup>らざら



所と思ひて假ふも悪きことと為せば忽ち罰と蒙る  
るり一人の知らざることと申を能知るゆゑふ善  
きことのふい幸ひと興え悪きことのふい禍ひと興  
ふるるり

遙るふ波ゆる東福寺の十二時の鐘ボオーン町内の夜番  
グ火の廻りく太鼓の音ドンドンドンモ閉取ちよりの  
目と覺してお呉んるさいと言らるアモシ何様すまや  
此様ふ眠らるるのさうらうぢれつとい今日朝ツから

仕といハ吾儕が平常の願ひどうも眠らつてお在の無理  
お起すの怨襟けきども壁に耳ある今の世の中昼の  
あとりと憚りて落々話一の出来ぬと云ふハ此間荒井  
先生さんの家で出て来と一件彼とマア何と思つてお  
在とエと身と指りよせて向かけらる此方ハ溢々目  
をこすり欠あるがら面倒さうふ一何といふをうと自  
己の力ぢやア田作の齒ぎりや逃村移人なる村岡  
さぬが捕たるとぬるのそあらず冥東へ引き下さ



れとうへ黄泉へ旅どちりあさまとと他人子あて云つ  
て見る女達らふ淡倦とり攘夷とりの連中み一味  
あさまととかつろのと自業自得とあきらめるより外仕  
方ダ極人丈と残念と思ひ筋骨だーと我の當坐と今  
さう監えて見るのと逆恨とであつと芝居でやる様  
筋がきの入り組とと関係のら此方の畑ふや根入り  
ぐろい風のゆるふ随つろ荷物と運ぶが肝心と火  
事場ふ齊しい江湖上思の美理のと騒ぎまわれ焼

死なとも言れ移人銭ふ成らぬ力瘤の出さずみわるのが  
へまア徳用どらうト四十八本銀鎖からんど事ハ枕辺  
ふ抛出して有る煙草入を烟管の先で引よせて煙草  
の煙と輪ふふきり空うたふいと居る顔と増え見  
詰忙然とりのと由言ひ得ず居たりしが落る涙のさうと  
掛しニタ糸の前ととと掩ひ膝と躍りよせ一閑取をも  
ちやア済ますすまい立を苦の無い一往昔あくと人弄へて  
末の秋お前ふ連らと古々とたなまれて此地へ来る途中



お前の御氣と踏出—尋ね—人の空蟬のかくふ成たる  
 財布の紐と松の下枝ふるげ掛とと思ひ出せを戦慄  
 とせり天神さぬの沖山とも知らずで二人が手み手を取  
 り北野のふと消るところと且那さぬ村岡さぬが夜参  
 りふち出るさきととお戻り道お目お止つてお救ひ請けお  
 前も吾儕も足の痛く函師よ糸とお手厚いお世話で  
 程なく丈夫お成るとお前の力量が有るうらうとしてお  
 出入りの都富士親方へ且那さぬよりのお声か、りて元

春雨二十七

好む角力とあり世間の人ふも  
 名と知らず仲間のうちでも立ちまて拵群  
 出世と誉そやされ人並勝れと  
 暮し成為るのも且那さぬの皆  
 お蔭夫不との事と  
 辨へぬお前さん  
 での無い惚気嫉妬と  
 言るが否さふ今まを味





えて居おとが祇園ぎおんの藝子げいこ勇鶴ゆうかくふ心をひらきき迷まよ  
ひ後あれが出でたのではいないませう平常つねふの男おとこの事ことども  
のヲ藝子げいこづららいも保養ほやうの一ひと世よふ云いふをとらき咎とがめの  
せぬが大事だいじの敵かたみとまき出でるぐり理りと非ひふまげる  
言いひ終まらし可あ惜う月つき日ひとべんくとお酒さけふをりり碎くだて  
居おるののの閑取腰せきとりこしがぬ抜ぬけましとうと悔くしら涙なみだと欣のこてん  
で口くち小ち任ませる雑言ざうごんと耳みみふも入いれずせり笑わらひし女達よんなた  
らお感かん心しんイヤあるらいののど勇鶴ゆうかくの身みの上うへの少すくし訳わけが

長春正十八

あつおくお己お己おが引ひきうけ世話せわとして遣やられ人ひと身みの  
振ふり方かた々々六むろい女よどと言いてま掛かりあひお恩おんふ  
さあつおくおことを忘われての仕舞しめの村岡むらおかさあがあ蘇生そせい  
てもた為なるとしみ面白おもしろへい知しるら彼様かれさまとし葉はちやア  
置おけくけきともも返かえらぬ旅路りょろへおどらりく足あきをるき  
の操あそびを人ひとが仕し入いれるくく夫それありおちり手てと付つけが  
マアまあ世せらと思おもふのヨよと亦また枕まくらと引ひきよせて夜具やぐ  
引ひきあらま被まけをおま場まのあきれ昔時あまとどをも無なしが



きつと思案の胸を定め何様でもおまさんがさう  
しと云なう吾侑ア吾侑の覚悟が有るそんな  
み眠らぬごゆらりとこころの済まざる寐るおいでト  
言ウ立う帯ゆり上げ身おしらんさんかろぐト  
床おかけらる都石々秘藏の刀とある取りく佳  
細き小脇お掻こそウ小褌と高くひき端しと  
素の方へいでんと為るあを遽しくも裳裾と煙  
管の厂首ふと一寸捺へつ起かろウ何處へ往のど

一旦那さぬのお後とおひりけ冥途へゆくのでは  
います「そりや亦何振しと」ハイおまさんの魂魄と  
為るおの刀を尋ねて置と文吉の家へ今か  
まぐよ出さるりつて用有る振りて呼びのど一怨  
その一ト太刀勝をより負れを直お黄泉お在す  
村岡さぬのお側へ注きおまさんの腰がぬけとかわら  
お前の代理おおまさんの刀を働きまうととヤ  
上げお前のお倍禮と為るところと思ひきつら



あさき あさき まい まい うみ うみ 合点都石何らの事と言ひ出さず  
挨拶を聞<sup>き</sup>く合点都石何らの事と言ひ出さず  
の次田と讀て知りねし

春雨文庫二編上之巻 終

春雨文庫二編上之巻

010190508221



